

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第3回講座概要

第1部：座学 巡拝の道・須走の町を知る「須走の成り立ち」

■日時

令和元年9月21日（土）9時20分～10時30分

■場所

富士浅間神社 社務所

■講師

松田 香代子 松田民俗研究所 代表



■講義概要

1. スバシリという地名

—「須」はさらさらとした砂のこと。遠州の大須賀町の須も海岸部の砂丘の事を表す。須走は火山灰の事を表していると思う。

2. 須走と須山

1) 須走と須山の共通点

—古くからの登山口の集落である。

—神明領である御厨（静岡県駿東郡地域）地区にある。伊勢神宮の神社にお納めする米や食糧などを上納する領地を全国的に御厨と呼んでいる。静岡県では磐田市の鎌田という御厨がある。

—馬乗せで物資を流通させることを生業とする「駄賃稼ぎの村」である。富士山は夏山の2ヶ月間でしか登山者が来ない。残りの10ヶ月は流通業で暮らしていた村が多かった。「須」の地名地区は火山灰土で水がしみるので農業的な稼ぎはあてにできない。富士山を取り巻く色々な流通業で生業を建てていた。

2) 須走と須山の相違点

—一本の道に沿って両側に家々が並ぶ街村。須山は集落。成り立ちが違う。

—宝永噴火で須走村は壊滅被害を受けたが、1年以内に戦略的な復興を遂げた。須山は登山道に噴火口が出現し復興に時間がかかった。宝永噴火口、宝永山は須山の登山道であり、現在の登山道は迂回している。

—須走の登山道は大行合（8合目）で北口の吉田口登山道と合流する。須走と吉田は兄弟のような関係であり、反面須山口登山道は近いが、単独の一本の道で頂上へ行く。

3. 吉田の町

—吉田の町は金鳥居から、まっすぐに道が通っていて両側に御師と呼ばれる家々が88軒並んでいた。

—金鳥居の真正面が富士山ではなく、左に曲がり北口本宮富士浅間神社、そこから富士山へ登る。

—上吉田は富士山に対して町が東西に並んでいたが、元亀3年の雪代災害で町を縦に移動させる町割りとした。上吉田町はいまだに雪代災害の脅威にさらされている。雪代掘りという両側に災害用の空堀が掘ってある。

—雪代は、須山、御殿場では聞かれない災害だが、須走にはある。しかし、須走は歴史的に町への災害はない。一昨年も馬返しで雪代災害があったが登山道である。この登山道がやられやすいのが特徴で、何度も山小屋が流されている。須走と吉田は災害の面でも似ていると言える。

－須山口の登山道の頂上には今はあまり沸いていない銀明水がある。かつては、岩倉具視が富士山頂に銀名水を届けたという記録がある有名な水であり、江戸時代は、火山の貴重な水で靈験あらたかな名水として購入されていた。

4. 須走集落

1) 自然環境

－集落が火山灰の上に造られているといわれているが、精進川(佐野川上流)が大地を削って河岸段丘の上に位置している。雪代や噴火の火山灰が流れ込んで災害が起こる場所ではなく、立地的にいい場所に集落ができたと言える。

－精進川は富士山を水源とした川ではなく、別の山の水源。この川の水をうまく利用して須走の集落が成立したのではないかと想像している。

－大変標高が高い。須走は静岡県で最も高い所に位置する登山口集落。同様に北口も 800m 付近に展開した集落。登山口に浅間神社ができ、御師町が展開した集落は須走と北口のみ。あとは、もう少し富士山から離れたところに登山口の集落がある。

－堆積土壌の為に農業には不向き。苦労して畑が作られた。

2) 街道の村

－生活に密着した集落であるとともに駿河・甲斐・相模の三国の境に立地している緊張感のある地域。武田信玄や北条など戦国武将が国盗りをするときにここを拠点とした。

－富士山への信仰登山をする人たち（道者）の落とすお金＝山役錢を握ることで収益が得た。

－籠坂峠が国境であり人と物の交流・交易の結節点になる。籠坂に上るためにはここで一度荷を下ろして馬を休めて、水やえさをやる。又は馬を交換して、山を越えて次の山中村に入る。

－富士浅間神社が文化の結節点となっている。

3) 町の防火対策

－災害は噴火だけではなく、大敵は大火である。大火対策がだんだん行われていく。近世の半ばには通りに面して町家が並ぶ、今のような町割りができた。御師町だが御師の家がずっと並ぶのではなく点在し、それ以外に交易の為に色々な商売をしていた町家が並んでいた。

－ほとんどの宿場町のほぼ真ん中に水路が通っていたが須走でもそうなっていた。これは生活用水であり、馬に水を与えるための重要な水路である。すぐに休めるように、馬をつけるものが取り付けられていた。

－今は側溝が両側に分けられている。住んでいる方はカワと呼び、生活用水に使われていた。現在は上水道が完備することによって蓋をされている。

－江戸時代の地方都市にも火切りという火事を類焼させない空き地、食い止め地を設けられていた。

－火切りはもともと人が住んでいたが、火事で焼けてあえて家を建てない広場を設けている。明治初期の須走村図を見ると、各通り 2ヶ所火切り地が設け、ヘタ（イチイ）の木を植えた。町を上・中・下に分断している。ヘタは静岡県東部地域によく見られる庭木。高冷地なので、榦や常緑樹が育ちにくい中で、寒冷地に適応する。

－ベアトの写真を見ると家のそばに流れていないので、真ん中に水路がある構図である。幕末から明治の間に両側に川が移行したのが分かる。道の真ん中に馬車鉄道（鉄の線の上を馬車が通るから馬車鉄道）の線路を敷くために両側に分けられた。

－火切り地のイチイの木は「火を噴くとイチイの葉が水を吹く」と言い伝えがある。水気が多い木なので類焼を食い止めると考えられ植えられた。

4) 多数の宗教施設

－江戸時代は通常、一村一社寺。しかし須走はたくさんのお寺があった。

- ・富士浅間神社
- ・香積寺(北側)
- ・西寿院(南側西)
- ・永昌寺(南側東)
- ・千体阿弥陀堂(浅間神社北側)：阿弥陀三像 木喰聖 但唱作の千体阿弥陀像

・不動堂(不動滝)：富士登拝のために禊をするところ。俗界の汚れを取る。吉田の方では、各御師の家に滝が設けられている。須走では共同の滝。佐野川の所にある。現在はない。

・野中大日堂：大日如来を祀ってあった。富士信仰と結びついていないが、富士山は宗教者が多く来るため色々な場所がある。人穴も富士講を創始した角行が修行をした所。

－須走集落に見られる近世の痕跡は、たき道道標や滝不動跡などの宗教施設、火切り地を境にして、上・中・下と宿場的なまちづくりをしてあるのが分かる。お寺がその周辺に設置されている。

－滝不動を管理していたのは永昌寺。

5) 富士山須走口の廃仏毀釈運動と下山仏

－富士山麓は徹底的な廃仏毀釈運動があった。須走口登山道の頂上の久須志岳に祀られているのが久須志神社（大宮浅間神社の境内社）。元々は薬師如来が祀られていた。大宮の頂上には、富士山本宮浅間大社の奥宮が祀られており、大日如来を祀る大日堂、薬師如来を祀る薬師堂がある。

・明治 8 年(1875) 薬師ヶ岳(薬師堂)が久須志岳(久須志神社)

・明治 12 年(1879) 西寿院廃寺→本寺の御殿場市東田中 宝持院へ

　　香積寺廃寺→本寺の御殿場市深沢 大雲院へ

　　永昌寺廃寺→本寺の御殿場市深沢 大雲院へ

　　千体阿弥陀堂はどこが管理していたわけでもないので、香積寺に引き継ぐ
→本寺である大雲院へ。仏像の移動に関係がある。

　　大日堂→野中神社 須走の人が今もお祀りしている。

－下山仏という富士山頂・山中・山麓にある聖域に祀られている仏像仏群を調査している。頂上の仏像群は火口の中に捨てられたり、持ち去られたり、背負って逃げ等ある。

－野中大日堂は村と関係ない所にあった。現在、演習場の中で許可がないと入れない。野中神社のお祭りの時は入る。雨が降らない時に、日乞いをする大日如来として有名で、地域の人たちが祈願した。近世近くまで行われていた。

5. 富士山東口集落としての須走

1) 富士山御師

－屋敷に御神前(部屋の名称)という祭壇を設け、お札や幣束を制作し、檀家と呼ばれる信者に配る。

－御師とは「御祈祷師」が縮まった。愛知の津島では「おんし」と呼び、伊勢神宮も昔は「おんし」。

　　神道的な事をする宗教師を御師で元々は祈祷師。病気や悪い厄を取ってくれる人を御祈祷師。

－檀那場(営業するエリア)は競合する。そこをかいくぐりながら自分の営業エリアを広げる。檀那場は全然違う所にある。大申学は広い範囲で持っていた。万延元年 60 年に一度の庚申の年、ご利益がある年には全国各地から登山者を休泊、案内の世話をすると御師。多い時は 1 日 100 人以

上。建具を外して廊下まで布団を敷き、お客さんを泊めたと聞いた。

－夏山が終わると檀那場の檀家廻りをして祈祷し、米で報酬を受ける。それが貯まると馬や汽車で送った。

－御神前は見事な祠でほとんどが江戸で作られた。どこの講社がどういうものをどうしたかが書いてある。御師は富士講の講社が奉納したものが納められて大きくなつた。

－御師は格が高い。プライドを持っていた。

－富士山牛王のお札：60 年に一度庚申の年は山頂には阿弥陀三尊がご来迎するというのが富士信仰の基本。これを刷って配つた。

－「まねき」は講社で用意して泊まった所、御師に奉納していく。

－寛延 2 年(1748 年)には御師は 17 名に固定。近代になると旅館経営に代わる。御師が経営するのは宿坊として、信仰登山者が宿泊した宿。富士講に所属していない道者は一般の宿に宿泊した。

－大申学、大米屋など御師の屋号は、旅館経営業の許可を届け出る時に名乗る屋号として付けられたもの。江戸時代は○○太夫と呼んでいた。神道裁許状、免許をいただくとき、御師名を頂く。

その御師名を名乗る。その時に国名も名乗る。近世はその名前で営業した。

－近世以降は、交通機関の発達により、多くの登山客が詰めかける。

－須走のみ「まねき」を暖簾のようにつなげて掛けた。吉田口にはない。

2) 交通機関の発達

- ・明治 22 年(1889) 東海道線御殿場駅開業
- ・明治 32 年(1899) 新橋・須走間馬車鉄道開通
- ・明治 34 年(1901) 須走・籠坂峠間馬車鉄道延長(富士吉田・籠坂間馬車鉄道と連携)。交通の要衝として、登山客の為だけではなく流通のために開かれた鉄道網という事が言える。
- ・明治 36 年(1903) 中央線開通により、東海道線から籠坂を越えへ物資を運ぶ必要がなくなる。
- ・大正 6 年(1917) 馬車鉄道西田中コウノ巣以北須走方面撤退
- ・大正 7 年頃 モータリゼーション いち早く須走自動車会社を設立。

大正期～昭和、乗合自動車(バス)や貨物自動車(トラック)が登山客や物資輸送の主役となる。

馬返しまで行き、そこから徒步。

3) 富士山噴火の歴史と須走

－富士山噴火 ①延暦 19～21(800～802) ②貞享 6 年 ③宝永 4 年

－宝永の噴火による須走の被害

- ・火山礫・火山砂が降り積もる：御殿場市・小山町～神奈川県西・中部
- ・火山灰：江戸を含む関東地方 霞ヶ浦まで
- ・家屋の倒壊・火災が多く起こった
- ・降砂による埋没：須走(4m)・大御神・棚頭、御殿場市柴怒田など(1m50cm～4m)
- ・伊奈半左衛門：須走の救世主 須走の翌年の夏山を迎えるように救助金を配布して救われた。本当の目的は、神奈川県の酒匂川(灌漑用水路として重要な川)の洪水災害が起こる。火山灰が降り、川底が上昇すると洪水がたびたび起こる。田畠に灰が流れ込むという二次災害をなんとかしろ、という為に任命されたが、須走の人に先にお金を配り救った。

★宝永噴火の予兆の言い伝え：ナマズが地震の予兆と言われるが、宝永の年、山から動物(ウサギやキツネなど)が下りてきたら、富士山が噴火した。

■パワーポイント資料

すばらしう隊養成講座
巡拝の道・須走の町を知る
須走の成り立ち

松田民俗研究所代表
松田 香代子

はじめに

- ・スバシリという地名
- ・須走と須山

共通点...富士登山道口集落
御厨領(静岡県駿東郡)
駄賀稼ぎの村

相違点...

街村の須走・集村の須山
宝永噴火で須走は壊滅的被害
須山は登山道に噴火口出現
須走口登山道は大行合で吉田口登山道と
合流
須山口登山道は単独で頂上へ

雪代の痕跡(旧馬返付近)



須走と須山

- ・共通点
富士山登山道口集落
御厨領(静岡県駿東地方)
駄賀稼ぎで暮らす村
- ・相違点
街村の須走・集村の須山
宝永噴火後に須山口登山道に噴火口

須走口登山道頂上の銀明水



1 須走集落

(1)自然環境

- ・精進川(佐野川上流部)の河岸段丘に
集落が展開
- ・海拔780メートル付近に立地、冷涼な気候
- ・富士山の噴火物の堆積土壌で
農業には不向き

(2)街道の村

- ・駿河・甲斐・相模の三国の境...軍事的要所
- ・人と物の交流・交易が盛ん...流通の拠点
- ・富士山東麓にまつられた富士浅間神社
...文化の結節点

富士急車庫前の賑わい
(山岸豊『画集 富士の里須走』1997)



(3)町の防火対策

- ・通りに面した町屋
- ・近世には通りの中央に溝(水路)
- ・現在は通りの両側にカワ(暗渠)
...生活用水・防火用水
- ・2箇所の火切地にヘタの防火林
...町を上・中・下に分断

本通の景観



本通り両側にあったカワ
(昭和2年夏・米山館蔵)



ベアト撮影の須走集落



絵葉書「須走の富士」
(米山館蔵)



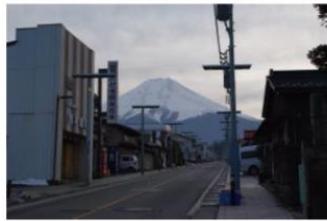
絵図に記された火切地



北国街道海野宿



上吉田の御師町



外川家住宅(タツミチと門構え)



(4) 多数の宗教施設

- ・富士浅間神社 東口登山道拠点(860m)
- ・香積寺(北側)
- ・西寿院(南側西)上の寺
- ・永昌寺(南側東)下の寺
- ・千体阿弥陀堂(富士浅間神社北側)
- ・不動堂(不動滝)...富士登拝のための禊ぎ行
- ・野中大日堂...修行者の籠堂

たき道の道標



元滝不動の石造物群



不動の滝の禊ぎ
(山岸昇『画集 富士の里須走』1997)



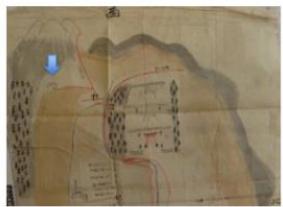
(5) 富士山須走口の廃仏毀釈運動

- ・明治8年(1875)薬師ヶ岳(薬師堂)→久須志岳
- ・明治12年(1879)
西寿院廃寺→本寺の東田中宝持院へ
香積寺廃寺→本寺の深沢大雲院へ
永昌寺廃寺→同上
(千体阿弥陀堂は香積寺→大雲院へ)
大日堂→野中神社
- ・明治19年(1886)浅間神社、県社に昇格

千体阿弥陀像(深沢大雲院蔵)



大日堂の位置



2 富士山東口集落としての須走

(1)富士山御師

- ・屋敷に御神前という祭壇を設け、お札や幣束を製作する。
- ・檀那場の導者を迎える、休泊・案内の世話ををする。(多いときは1日100人以上)
- ・夏山が終ると檀家廻りをして祈祷し、米で報酬を受けた。

ゴシンゼンサン
(武蔵屋旧蔵・富士浅間神社蔵)



ゴシンゼンサン(小申学蔵)



御師米山佐久馬
(大正5年死去・大申学蔵)



御神前の隨身像(大申学蔵)



御師のお札摺り用具
(大米谷蔵)



富士山牛王のお札
(富士浅間神社蔵)



酒造満足のお札
(富士浅間神社蔵)



麻布山三元講の奉納石造物群



山三元講のマネキ
(富士浅間神社蔵)



上小林東岳院(奥櫛地蔵)
に奉納された丸東の灯籠





- 寛延2年(1749)には御師17名に固定
→近代になると旅館経営
- 屋号は近代以降、旅館業において命名される。近世は御師名を名乗る。
- 近代以降は、交通機関の発達により多くの登山客が詰めかける。



(2) 交通機関の発達

- 明治22年(1889)東海道線御殿場駅開業
- 明治32年(1899)
新橋・須走間馬車鉄道開通
- 明治34年(1901)
須走・籠坂峠間馬車鉄道延長
(富士吉田・籠坂間馬車鉄道と連携)
御殿場駅→(馬車鉄道)→須走口
- 明治36年(1903)中央線開通

- 大正6年(1917)
馬車鉄道西田中コウノ巣以北須走方面撤退
- 大正7年頃 須走自動車会社設立
- 大正期～昭和
乗合自動車(バス)や貨物自動車(トラック)が
登山客や物資輸送の主役となる



2 富士山噴火の歴史と須走

(1) 富士山噴火史

- 延暦19～21年(800～802)
……東麓の側火山から噴火

- 貞観6年(864)
……北西側、長尾山(側火山)から
噴火
セノ海と本栖湖に溶岩流
→青木ヶ原樹海・
西湖・精進湖・本栖湖

- 宝永4年(1707)
11月23日(新暦12月16日)
南東側五合目付近で噴火
(16日間)
→宝永噴火口(3つ)と宝永山

宝永噴火口(噴火物)



宝永噴火口(第1火口)



宝永山(赤岩)



(2) 宝永噴火による須走の被害

- 富士山麓の東方面に被害
- ・火山礫・火山砂が降り積もる
...御殿場市・小山町～
神奈川県西・中部
- ・火山灰が降る
...江戸を含む関東地方まで

宝永噴火絵図(御殿場市山之尻)



宝永噴火絵図・昼(沼津市原)



宝永噴火絵図・夜(沼津市原)



宝永噴火絵図・焼納り(沼津市原)



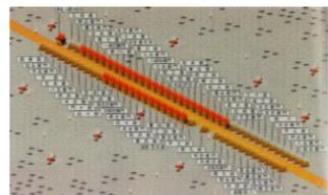
- ・家屋の倒壊・火災.....須走
- ・降砂による埋没
.....駿東郡小山町須走・大御神・
棚頭、御殿場市柴怒田など
(1m50cm～4m)

- ・火山砂による河床の上昇→洪水
.....神奈川県酒匂川流域
(小田原平野)

噴火の際に頭にかぶったとされる鍋



須走村の被害状況



宝永噴火の降灰分布



須走村家作御救金割渡帳(宝永5年御厨領)



富士浅間神社の根上りモミ



根上りモミの根回り(約4.61M)



宝永の噴火後も生き残った
小野大和守家の桜



宝永噴火の予兆の言い伝え

- ・宝永噴火の年、夏が終ったら(9月頃)、山から動物(ウサギやキツネ)が下りてきた。「これは何かあるぞ」と言っていたら富士山が噴火した。

※宝永噴火前に宝永地震(10月4日)発生